

## ワークショップ [WS1]

### Webにおけるナショナリズムの表出と社会情報学

#### 趣旨

20世紀終盤以降の国際的な「ナショナリズム」の高揚は、複雑な問題として多分野の研究者の注目を集めて続けています。理論化を目指して学際的な検討が続けられていますが、まだ議論の不十分な重要論点も多いのが現状です。ナショナリズムの実践における Web 利用はその一つと言えるでしょう。群馬大学社会情報学部の共同研究プロジェクト「Webにおけるナショナリズムの表出に関する研究」(群馬大学:伊藤賢一, 岩井淳, 柿本敏克, 河島基弘, 高山利弘, 平田知久, 山内春光, Thinking「O」主催:大澤真幸)では、この論点について探索的な検討を行ってきました。社会情報学会の後援を受け、このテーマの公開シンポジウムを開催するなどの活動も行ってきました。本ワークショップではこの経緯を踏まえつつ、さらに幅広く「ナショナリズムと情報」の問題を検討したいと考えます。Webのみでなく、広く情報の観点からナショナリズムの諸現象を議論し、社会情報学のあり方についても考えたいと思います。

#### 登壇者

伊藤賢一 (群馬大学)

平田知久 (群馬大学)

岩井 淳 (群馬大学)

## コミュニティ放送の「基幹放送」制度化に伴う諸問題

### 草の根の声を伝える持続可能なラジオのために

#### 趣旨

東日本大震災後、5年間、被災地を支えてきた臨時災害局は、多くが閉局し、現在残っている局も、このままではコミュニティ放送への移行は難しいのではないかと危惧されている。とくに2011年以後、基幹放送の枠組みに入ったコミュニティ放送は、防災・減災への期待も高く、自治体から経済的な支援を受けなければ、過剰な負担を負うことになった。

一方、1995年の阪神淡路大震災後、被災した神戸市長田区の在住外国人たちのために多言語ラジオ放送を始め、翌年コミュニティ放送となったFMわいわいも、これまで21年間、地域のマイノリティの人々の社会的包摂を目指して放送を続けてきた。途中、非営利法人化し多様な財源を調達してきたが、経済的な自立の困難や、基幹放送転換に伴う防災・減災への過酷な期待・負担から、本年3月31日、総務省に放送免許を返納した。

コミュニティ放送に移行できない臨時災害局とFMわいわいの免許返納は、基幹放送の問題点が顕著になった事例といえる。

本ワークショップでは、郡山市で臨時災害局を継続している富岡町のおだがいさまFMの運営担当者である吉田恵子さんを報告者としてお招きし、放送を必要としている地域であるにも関わらず、コミュニティ放送が開局できない状況について語っていただく。

北海道には20局を超えるコミュニティ放送局が存在し、北郷裕美さんは彼らからのヒアリングを元に、地域に欠かせない公共性を備えている局の実情を調査してきた。北郷さんや地元局の人々にも参加いただき、「基幹放送」としてのコミュニティ放送のあり方を探りたい。

#### 司会

松浦さと子（京都大学地域研究統合情報センター）

#### 報告者

吉田恵子（社会福祉法人富岡町社会福祉協議会事務局次長・おだがいさまFM）

#### コメンテータ

北郷裕美（大正大学）

## ビッグデータの社会的意味—災害時の活用を中心として

### 趣旨

近年ビッグデータを活用し膨大かつ多面的な情報を駆使することにより、「人」の行動等を把握するデータ環境は劇的に変化している状況にある。そしてその中核の一つとなっているのが緊急時、災害時の利活用である。だが、東日本大震災を経てビッグデータの重要性は喧伝され、技術的な開発は進められているように見えるものの、住民の避難や救助・支援などにおいて、具体的にどのように活用が可能かについての検討はほとんど進んでいない。

例えば、今年発生した熊本地震においては、知見もあり、電気・通信の状況は東日本大震災とは比較にならないほどよく、5年前の東日本大震災当時と比べ莫大なデータの蓄積・交換が行いえたにも関わらず、被災状況の把握、復興など減災にビッグデータや情報技術が活用できたとはいえない。

この数年間で災害時のビッグデータの活用が実現できなかったのは、技術的障壁のみならず、社会的障壁が多く存在する一方、それらへの検討が不足していたからである。本ワークショップでは、震災時の利活用を中心にすえ、現在のビッグデータの利活用としての開発の方向性である解析手法、即時性、可視化などに着目し、今後のビッグデータの活用状況を見据え、とくにビッグデータを活用する際の障壁などについて検討する。

### 司会

関谷直也

### 報告者

河井大介（東京大学大学院情報学環）

関谷直也（東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター）

秦 康範（山梨大学工学部）

阿部博史（日本放送協会）

### 討論者

藤代裕之（法政大学社会学部）

ワークショップ [WS4]

メディア研究の方法論：

## パフォーマンス、労働、リメディアエーション

### 趣旨

本ワークショップではニュー／オールドメディアをめぐる問題系を多角的に考察する。近藤は映画文化におけるレコード／VHSのResidual（残余的）な特性、仁井田は映画館における舞台上演映像のライブ性、難波（純）はポストヒューマン概念を軸とした映像文化の言説史、難波（阿）は情動労働と主体概念の変遷、野澤はメディアミックスにおける声優の労働と交感性に注目し、先端的なメディア研究の方法論について検討する。

### キーワード

オールドメディア、ニューメディア、情動、メディアロジー、オーディエンス

### 発表者

近藤和都（東京大学）

仁井田千絵（早稲田大学）

難波純也（東京大学）

難波阿丹（上智大学）（司会）

野澤俊介（東京大学）（コメンテーター）

## ワークショップ [WS5]

### 「社会情報学におけるキャス・サンスティーン再考」

#### 1. 企画趣旨

法学者キャス・サンスティーンのもたらした業績は多岐の分野にわたっている。特に情報学との関連の深い *Republic.com* (2001; 2007) や *Infotopia* (2006) のような著作だけでなく、リバタリアン・パターナリズムや選択アーキテクトの発想も意思決定にまつわる情報の取り扱い方について論じていると言えるし、リスクと予防原則に関わる研究も、入手できる情報が限られた状況下における意思決定を扱っており、社会情報学との関連は深い。しかし同時に、サンスティーンの知見の受け止められ方は様々であり、未整理のままであるともいえる。法哲学や憲法学、行政法学、民主主義論などの幅広い分野で学術的貢献を残し、またオバマ政権において情報・規制問題局 (Office of Information and Regulatory Affairs, OIRA) のトップを務める (2009年～2012年) など社会実践上の貢献も大きく、理論的にも実学的にもサンスティーンから学ぶべきことは多いと思われる。

しかし、論点が多岐にわたること、また啓蒙書を含め非常に多作な研究者でありながらも邦訳されている文献は相対的に少ないという事情も重なり、日本の学术界にとっても、また政策担当者等の実務家らにとっても、サンスティーンのもたらした知見の重要性や位置付けは十分に咀嚼し自分たちにとっての知的資産として活かされていらないのではないか。本ワークショップはこのような問題意識に立ち、各報告者よりサンスティーンがもたらした論点をそれぞれの視点から解題を行う。

#### 2. プログラムとタイムスケジュール

- 00:00-00:05 コーディネーターから趣旨説明 高原基彰 (関西学院大学)
- 00:05-00:25 報告1「日本の経営実践における nudge」 尾田 基 (東北学院大学)
- 00:25-00:45 報告2「最近の公共政策における nudge の導入とそのガバナンスに関する考察」 西田亮介 (東京工業大学)
- 00:45-01:05 報告3「熟議民主主義からアーキテクチャの設計へ」 成原 慧 (東京大学)
- 01:05-01:30 コーディネーターからの質問と報告者からの応答
- 01:30-01:55 自由討議
- 01:55-02:00 まとめ コーディネーターより